研究テーマ：自己表現力を高めるための指導の工夫

所属 高知市立城西中学校
氏名 澤本 さわか
R G J H 2

1 研究の背景

本校は、高知市の中心部に位置し、生徒数 319 名の中規模校である。校区内 3 校の小学校から入学してきた 89 名の 1 年生は、素直で明るく屈託のない生徒たちである。が、その反面、指示がないと積極的・主体的に動くことができず、指示を待っているという面も見られる。1 学期、全体的に見て意欲的に取り組むことができていた。しかし、2 学期になって、徐々に学力の格差がつき始めてきた。授業の内容については、自己表現できる場の設定が少なく、コミュニケーション能力の向上に結びつく授業を組み立てることができずにいる。そこで、自己表現力を伸ばすための授業を組み立てていきたいと考えて、テーマを設定した。

2 リサーチクエスション

「生徒の自己表現力を高めるには、どうすればいいか。」

3 予備調査

- 1) 授業観察の結果、活動に意欲的に参加できている。しかし、正しく書いたり、表現したりする力に乏しい。家庭での学習の定着ができていないことも背景にあると考えられる。
- 2) 期末テスト結果より、全体的に見ると良い結果となった。気になるのは、早くも 3 割近くの生徒たちが、50 点以下であり、英語への学習意欲を低下させつつあるという事実である。学習内容が高度化するにつれ、さらに学習意欲を持たない生徒たちが増えてくることが予想される。
- 3) 授業アンケートの結果から、自分の授業は、「何を学習するのか」、ねらいを明確にできていなかったことが示された。また、励ましや声かけがされていないと感じている生徒たちも多い。授業の中で、自分は大事にされていないと感じていた生徒たちも多かったのではないかと反省した。さらに、自分で考えたり、活動したりする時間も設定できていなかったのも、授業の準備不足である。
- 4) 生徒の声からは、「1 学期は、すごく楽しくできた」「ゲームや発音練習が楽しかった」「自分ですんでできた」など、肯定的な意見が多かった。

4 仮説の設定

- 仮説 1** 音読活動の時間を増やし、英語をすらすらと読めるようになることが、「聞くこと」や「話すこと」の活動に結びついてくるだろう。
- 仮説 2** 基本的な質問や答えを使って、ペアや集団でのコミュニケーション活動を増やすことで、英語での表現力が定着してくるだろう。
- 仮説 3** 新出文型既習後に、自己表現文を書く機会を授業の中で必ず設けていけば、生徒たちの書くことにおける表現力がついてくるだろう。

5 計画の実践

- 1) 授業中での、音読の時間を増やし、クラスで発表する機会を設ける。クラスに評価を

してもらうことで、意欲を喚起させたい。また、音読の発表を聞くことでも、聞く力を養いたい。

- 2) 授業初めのウォーミングアップで、英語での簡単な受け答えをさせ、話したり、聞いたりする活動に慣れさせる。
- 3) 新出文型を既習後、自己表現文の課題を与える。評価して、生徒たちに返し、定着をはかる。

6 実践の結果

- 1) 学期に2回程度、音読テストを予告し、クラスの前で発表させその他のもの全員に評価させた。その事は、意欲につながり、テスト日の授業開始前には、休み時間から音読の練習をしている生徒たちの姿があった。また、他の生徒たちの音読を聞くことで、自分たちの自己評価にもつながったようである。
- 2) 授業初め、簡単な英語での受け答えをすることで、大分、天気や、数字の言い方が定着してきた。また、教師の質問を文脈から理解しようとする態度が身についてきた。前時での既習事項を使つての受け答えでは、基本的な表現が口頭で、できるようになってきた。さらに、学期末にALTと会話テストを行い、その実力を試した。
- 3) ノートやワークシートを使って、新出文型事項を用い、英文の一部で自分の立場に置き換えて英作文をさせたり、また、自己紹介文では、家族や友人の紹介を英文で表現させるなどを行った。ほとんどが、定期テストでもよく書けていた。

7 結果の検証

- 1) 音読テストでは、思ったより良い結果は得られず、ABCの評価においては、A(声も大きく、正しく読める)が約40%、B(時々つまるがほぼ読める)が、約53%、残りの約7%の生徒たちは、ほとんど読めず練習もしてきていない生徒たちであった。しかし、見方を変えれば、ほとんどの生徒達は、英文をほとんど読むことができ、読める可能性を持った生徒たちである。今後の指導の在り方が問われていると言える。
- 2) 簡単な会話テストは受け答えをすることができ、9割近くの生徒たちがA(よくできる)の評価をもらうことができた。日頃の反復練習の成果ではないかと思われる。
- 3) 自己紹介文や3単現を使った英文については、友人や家族について、8割以上の生徒たちが正しい英文を書くことができていた。これは、定期テストに向けての意欲が結果につながったと思われる。

8 成果と今後の課題

1学期は、英語が初めての教科ということもあって、生徒と共に楽しく授業を行ってきた。ところが、2学期になり、急に生徒指導に追われることが多くなってくると共に、授業も騒がしく集中力の途切れることも日常茶飯という状態になってきた。これは、やはり年度当初から授業規律をしっかりと生徒たちに身につけさせなかった自分の責任であると痛感している。今一度、初心に返って奮闘している毎日である。さらに、1学期同様、授業アンケートを行ったが、特に好転している項目もなく、指導者としての自分の姿に改めて愕然とさせられた次第である。しかし、生徒たちの感想の中では、「先生の説明がわかりやすかった。」というものが多く、肯定的に受け止めてくれている生徒たちも多くいることも励みとなった。その生徒達の思いを大切にしつつ、3学期の授業改善に向けて取り組んでいきたい。

3学期は、生徒たちの自己表現力の向上を目標に置き、ビンゴやペア・グループ学習を活発にさせ、個人の意欲を喚起する集団を作ることに重点をおきたいと思っている。2学

期末の定期テストの結果から、上位と下位の2極分化が進んできたことがはっきりしたので、より一層、家庭学習にもつなげる授業の組み立てをはかっていきたい。